

(5) 自閉症の認知・言語の情報処理の特徴

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 修士課程 森常 裕樹

【要旨】

本研究は自閉症の認知・言語の情報処理の特徴を WISC-III の群指数の比較, WISC-III および K-ABC のプロフィール分析を行なうことによって検討することであった。対象者は IQ が 100 以上の男性の児童 1 名であった。IQ を 100 以上としたのは知的障害の影響を考慮しないですむようにするためである。

WISC-III の群指数の比較した結果は、「言語理解」, 「知覚統合」, 「注意記憶」, 「処理速度」の 4 つの群指数のうち, 「注意記憶」と「処理速度」の 2 つに低下がみられた。次に, WISC-III および K-ABC のプロフィール分析の結果は, 「入力」の段階では情報の符号化が弱く, 「統合・貯蔵」の段階では継時処理(系列化), 視覚的系列化, 聴覚および視覚の短期記憶が弱く, 「出力」の段階では視覚 — 運動の協応が弱いことが明らかとなった。加えて, 「影響因」として不安, 集中力の低さ, 被転導性, 注意の範囲, 固執性の存在が明らかとなった。また, 長期記憶, 習得知

識, 知識の蓄え, いわゆる結晶性知識は強い能力として現れた。

これらの結果の情報処理の各段階の弱さは, ワーキングメモリーの障害を示唆していると考えられた。そこで Baddeley のワーキングメモリーのモデルに従うならば, そのモデルの中央実行機能が障害されていると考えられた。また, 一般的に視覚的な能力が優れていると言われている自閉症だが, 継時処理(系列化)あるいは視覚的系列化が弱い能力として現れていることが示しているように, ものごとを順序づけて利用することや処理することは優れているとは言えないのである。したがって, TEACCH の構造化にみられる左から右あるいは上から下に一貫して整理した情報を提示することや, 注目すべき情報を際立たせものごとを行なう手順を示すような視覚的支援は自閉症にとってその能力の弱さを補い, あるいは代償しており有用であると考察された。